ピッタインダウン

（おきあがりこぼし）

第47号

発行日　2024年7月1日
発行人　矢代　しイ
秋田市御野場7－1－29－305

白い花

五月の昼下がり
街路の植え込みの
ドウダンツツジが
驟雨に打たれている

雨脚は速く
強い風に押されて
利休鼠の雨は
歩道に流れてゆく

雨が上がると
清められた花花は
さっぱりした素顔を見せる

白い花に香を聞くと
母乳のような
あえかな匂いを漂わせて――

ジンジョ様

山田集落は
大館市（旧田代町）の北西にある
田んぼで取り囲まれ
ひっそりと
静まり返っている場所（ところ）だ

周縁は深緑の樹木でかたどられ
自然を固守する
人々の強い意志が込められた
要塞のようだ

歩いている人はいない
猫や犬の鳴き声もしない
無残にも
朽ちた荒（あば）ら屋の臭気は
集落を出て行った

家族　息子　娘たちへの
絶ちがたい思いなのだろう

迷路のような細道が
八か所に祀られている
道祖神へと導く

道祖神の形や表情は
少しずつ違い
素朴な外見には
おかしみも
温かみも漂っている

路傍に立ち
悪霊や疫病の侵入を防ぎ
集落を守る賽（さい）の神
赤坂のジンジョ（地蔵）様は
藁人形の神様
胴体は藁

頭部は木で作られている

男神の
四角い下駄のような顔
太い眉と大きな鼻
力強さを宿す鋭い眼
白い歯をギュッと噛み合わせ
表情は威厳に満ちている

女神は
赤いほっぺに
かわいいおちょぼ口
男神の隣で
貫禄がある姿に心を寄せている

縁結びや子宝に
恵まれるようにと願をかける
ジンジョ様の乳房は
男女とも丸く盛り上がり

幸せのシンボルは
男は描いた大根
女は描いた蕪

長閑な風景の
土の香りがする暮らしのなかで
集落の人々は
道祖神とともに
これからも生きつづける

春

小包が届いた
若いころ勤めた
職場の後輩からだった

今が旬の
孟宗竹と
草餅の
燃えいずる春のいのちを
やさしさで包み
今年も送ってくれた

箱には
小糠や京芋
自家製の味噌も入っていた

何枚もの外皮をまとった
孟宗竹は
どっしりと重く
茶色の皮をむくと
春の喜びにあふれた
淡黄色の
みずみずしい息吹が現れた

草餅は
春野を圧縮したような
みどりの顔
よもぎの香りが
素早く
口のなかに――

ふっくらとした
春が
部屋中に広がった

ルージュ

ほのかに甘い香りがただよう
庭の一角に
静かにたたずむ
一本の真紅の薔薇と目があった

近づくと
薔薇は笑みをたたえ
蔓の長い手を僕の肩に伸ばし
さっとすり寄り
香水のような
なまめいた言葉を
耳もとでささやいた

言葉の香りが
僕をとろけさせた
そのとき

周囲の薔薇が
ひやかしの言葉を発した

人間と恋人になりたかった
薔薇は
棘の眼で
あたりを睥睨した

静けさが戻ると
ゆれる真紅のルージュに
僕は
そっと顔を近づけた

旅

気儘な旅に出る

行き先も
目的も
旅程も
決めない
リュックひとつだけ

足の向くまま
見知らぬ土地を訪ねる

胸のポケットには
浮かれ心と
期待が
ごちゃ混ぜ

寄り添うのは影
足を止めれば
そっと佇み
しゃがみ込めば
無言の黒い石となる

堤を行くと
たゆたう川面に陽が映えて
きらめき光っている
のどやかな心地

ふいに
名前が呼ばれた気がして
ぷかりと浮かんだ雲を見ると
風の指が
遠慮がちに
わたしの頬をなでた

雑然とした路地から見える

くすんだ山の頂は
まだ　まだ
つめたい雪色

春色

春色の空に
雲が浮かんでいる

じっと見つめていると
ゆったりと
かたちを変えながら流れていく
ジェスチャーを交えた
雲の会話のよう

空の水面に
雲の船が漂う
春風に乗ってきた
白蝶に似て
のびやかに映る
光る海原に

はぐれ雲が点在
互いにささやくように
互いが引き合うように
手を結び
ひとつに重なった

軽やかな空に
まっすぐ手を伸ばすと
わたしにも
春色の空がひろがった

徒然のエチュード　44

①

プッシュ！

小籠包の汁が
唇を直撃！

アチッ　アチチチチ……

日に日に
たらこ唇になる
矢代であった

②

昨夜の風は強かった

ニセアカシアの花を風がさらって
道路に
花の波紋が
くっきりと残っている

いつしか
季節は巡り
黄緑の葉も色を深めて

わたしも
年の数だけ
古色を纏っていく

③

ドカン　ドッカン
ドギッ　ドドドドド

何の音
だれか走っているの？

ジグ　ジグジグジィ
ムギュ　ギギムギュ

何の音
だれか暴れているの？

チク　ヂグヂックン
ドガ　トトトトト

心の臓の暴走！

④

目前に
真っ黒い
山が仁王立ち

でも
一部分だけ
円く輪になって
妙に明るい

な～んだ
日が当たって
光っているだけじゃん

⑤

詩できた？

うん　一行だけ

じゃあ　明日も一行書けば

二週間で

ソネットの完成だね

【ご案内】

第十五回「ピッタの会　現代詩勉強会」

講師に木村哲夫氏をお迎えし、左記の通り勉強会を開催いたします。演題は未定です。

質問コーナーを設ける予定です。ご参加をお待ちしております。

日時　九月十四日（土）

時間　午後一時～三時半　無料

場所　あきた文学資料館

申込　参加希望者は九月六日（金）までに、矢代レイにご連絡ください。

なお、資料準備のため、必ずお申し込みください。

☎０９０－１９３５－１１８０

【ご案内】

矢代レイ 詩展 ―しなやかな言葉―

日時　7月1日（月）～7月31日（水）
時間　9時～15時　無料
場所　秋田銀行本店　ロビー
　　秋田市山王3－2－1

なお、土曜日・日曜日・祭日はお休みです。
お問い合わせは、矢代レイまで。
☎090－1935－1180

【あとがき】

六月九日（日）、秋田弁護士会主催の「死刑を考える日」が開催された。映画上映（作品「獄友」二〇一八年公開）と金聖雄監督の講演会。演題は「映画作りの中で考える冤罪・死刑制度」。

冤罪により数十年を獄中で過ごした「袴田事件」の袴田巌さんら五人を取材したドキュメンタリー映画。彼らは言う。《不運だったけど、不幸ではない》と。娑婆で再会した獄友たちは、獄中での出来事を懐かしそうに話す。まさに、彼らの青春は獄中にあったのだが、明るい笑顔が印象深い。

嘘の自白を強要され、無実でも殺人犯の刻印を打たれる。司法の闇、人間の尊厳、命の重さ、再審公判までの長い道のり。《無罪》を勝ち取ったとしても、奪われた尊い時間は取り戻せない。

今秋、袴田さんの再審無罪が必ずや確定するだろう。姉のひで子さんの、「せめてこの冤罪事件を教訓にしてほしい」との言葉が重く心に響く。